

[寄 稿]

「ロイロノート・スクール」を活用した実践事例

前田 武男*

Practical examples of using the LoiLoNote School

Takeo MAEDA*

Abstract

In 2019, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology proposed the GIGA School Initiative, a plan to provide one learner computer and high-speed communication network for each pupil nationwide. This was an effort to emphasize the importance of the ability of students to use ICT and to reduce the gap in ICT environments in schools.

Next, in 2021, the plan set forth a policy to achieve "Japanese-style school education in 2021," emphasizing "individualized optimal learning" and "collaborative learning. In the case of "individualized learning," it is necessary to provide guidance according to the characteristics and progress of each student, and it is important to use ICT to grasp the learning status and self-regulate it. In collaborative learning, group activities and presentations are promoted using one terminal per student to facilitate learning from different perspectives.

With the goal of enhancing students' skills to proactively and actively utilize tablet terminals and other devices in class, and to use them as tools to improve students' own thinking, judgment, and expression skills, we report on a class practice using LoiLoNote in the "Social Studies and Geography and History Education Methods" course offered in the first semester of FY2023. The following is a report on the class practice using LoiLoNote in the "Social Studies and Geography/History Subjects Teaching Methods" course offered in the first semester of 2023.

KEY WORDS : Teaching research, ICT application, development of social science teaching materials

*九州共立大学経済学部

*Faculty of Economics, Kyushu Kyoritsu University

はじめに

文部科学省は2019年12月、児童生徒1人1台の学習者用コンピュータとそれを活用するための高速大容量の通信ネットワークを、今後5年間のうちに一体的に整備することを盛り込んだ「GIGAスクール構想」¹⁾を打ち出した。

Society5.0時代に生きる児童生徒にとっては、ICTの活用は文房具の利用と同様の必須スキルである。しかし、この段階では日本の学校のICT環境は、諸外国と比較して遅れている状況であった。また、自治体間の格差も大きかった。そこで、国が財政措置を講じ、1人1台の学習者用コンピュータの配備とそれを活用するための高速大容量の通信ネットワーク環境の整備を全国一律に進める施策が打ち出されたわけである。²⁾

また、2019年度末からの新型コロナウイルス感染症が拡大する中、その対応として、基本的な感染症予防の徹底、学校の臨時休校、分散登校、オンライン学習など児童生徒たちへの教育を何とか確保するためにこれまで経験したことのないさまざまな教育活動が取り組まれてきた。こうした中、学校ではその役割として、学習機会と学力の保障のみならず、全人的な発達・成長を促す役割、居場所・セーフティネット等が再確認された。休業中、学校からの指示がないと、児童生徒たちが学びを止めてしまったことから、自立した学習者としての育成に課題があることが明らかになった。

2021年1月、文部科学省は『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～』（中央教育審議会答申）³⁾を出した。この中で、目指す「令和の日本型学校教育」の姿は、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」であり、学校は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善により、学習指導要領にある3つの柱をバランスよく育むことが示された。^{4), 5), 6), 7), 8)}

「個別最適な学び」とは、児童生徒が自らの学びが最適になるよう、自己の特性や学習進度に応じ、学習の内容や課題、教材や方法等を選び学ぶことを指す。その実現には、児童生徒の実態に応じて教師が学習内容の確実な定着を図ることが必要である。これまで以上に児童生徒の成長や悩み等の理解に努め、個々の興味・関心・意欲等に応じたきめ細かく指導・支援するとともに（指導の個別化）、児童生徒が自らの学習状

況を把握し、主体的に学習を調整することができる（学習の個性化）ようすることが重要である。

その際、1人1台端末の活用により、自ら見通しを立てたり、学習状況を把握し、新たな（従来と異なる）学習方法に取り組んだりする。1人1台端末を用いた発表や話し合い、グループでの意見整理、共同制作等の「協働的な学び」は、異なる考え方が組み合わせたり、高次の学びを生み出したりする中で、児童生徒相互の感性や考え方に触れ、刺激し合うこと良さを認識することができる。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するため、ICTの効果的活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備の観点から、2022年度後期から社会科・公民科教育法の授業改善として令和の日本型学校教育を目指す学校現場の実情を実感できることを目指した授業を計画した。その際、学生が受け身となるような授業ではなく、主体的に学び、主体的に実習すること、すなわち、アクティブラーニングの視点を特に重視した。

また、Society5.0時代到来に伴い、学校現場でのICTの利活用が進む中、教科教育法においてどのような内容をどれだけ指導すればよいのか、試行錯誤の段階ではあるがその指導法について、2023年度も継続して行った。

1. 「社会科・地理歴史科教育法」への導入

(1) 目的

筆者が担当する教職科目の一つである「社会科・地理歴史科教育法」において、毎年、30名程度の履修者ではあるが、学生は受け身となる場合もあり、学生が主体的・能動的に学ぶ工夫が必要である。そこで将来教職を目指す学生に対してタブレット端末等を活用した授業ができるようにスキルを高め、学生自身の思考力・判断力・表現力を高めるツールとして活用できることを目標に、学習支援システムとして、ロイロノート・スクール（株式会社LoiLo社、以下、ロイロノート）を2022年度後期から導入した。ロイロノートはクラウドサーバーにアクセスしている全ての授業で使える授業クラウドであり、2022年2月時点で1日の利用者数が200万人を越えており、2019年12月に比べ、約20倍に増加している。これまでも小・中・高校・大学等で多く教師が新たな授業デザイン開発に取り組み、全ての教科・領域で実践事例が報告されている。

2023年度前期に開講した「社会科・地理歴史科教育法」において、ロイロノートを活用した授業実践を行ったので報告する。ロイロノートのアプリとしての可能性や授業の中での活用の可能性を確かめる。その際、意見交流やシンキングツールとしてロイロノートを活用することで学生がどのような利点を感じているかについて検討することを目的とした。

(2)対象者

本学で社会科・地理歴史科教育法を受講した27名の学生を対象とした。

(3)実施時期

2023年4月から2023年7月にかけての授業の中で実施した。2022年度後期から授業にロイロノートを導入して使用したが、2023年度は、年度当初から使用し、授業の中で学習指導要領の趣旨や学習指導案、アクティブラーニングの手法等についての学習を十分積み、意見交換についてもある程度行うことができるスキルが身に付くことを目指している。

(4)講義の概要

本稿で対象とした講義は、「社会科・地理歴史科教育法」である。本講義では、次の3つの到達目標を掲げ、授業を行っている

①学習指導要領に示された中学校社会と高等学校地

理歴史科の目標や内容をその接続を踏まえて理解する。

②現代社会の社会問題に関するテーマの教材研究を踏まえ、ICT機器を有効に活用しながら、生徒の資質・能力の育成に資する中学校社会科、高等学校地理歴史科の授業を構想できる。

③実際の授業場面を想定した学習指導案を作成でき、それに基づく模擬授業を行うことができる。

2. ロイロノートの導入

本学では学内のWi-Fi環境が整っており、100名を超える学生が同時にアクセスすることが可能な通信状態である。筆者の方でロイロノートの受講学生分のログインID、パスワードを発行し、ノートパソコンやタブレット、スマートフォン等の端末で講義時にログインして利用方法について説明した。なお、ブラウザ（Google Chrome、Microsoft Edge等）で使用しているため、OSの制約は特にないことはとても汎用性が高い。

本講義は、大学3年生を対象とし、開講している。ロイロノートを高校時に活用したことがある学生は、いなかったため、授業の画面を教室前方のスクリーンに投影し、ロイロノートでできることを赤枠のアイコンの順に解説した。（図1）

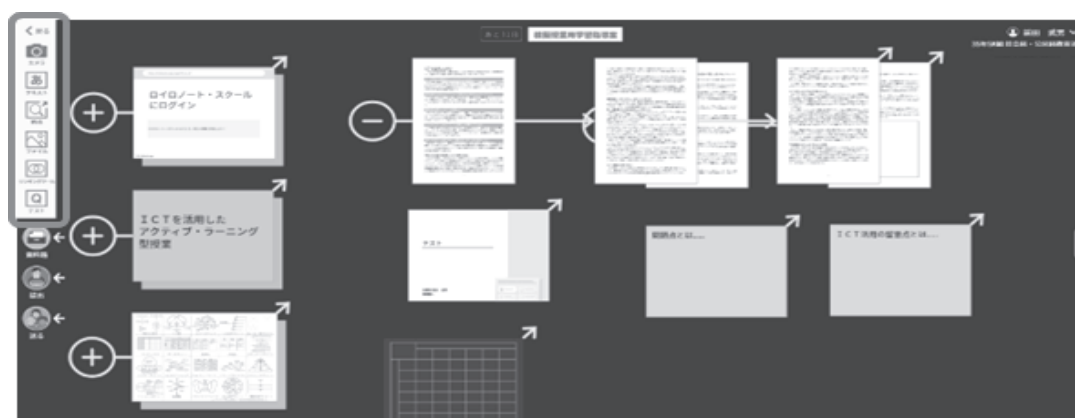


図 1

特に、ロイロノートを利用することの意義について、導入時に説明を行った。さらに、昨年度までコロナ禍にあった学校現場では、ICT機器を取り入れた授業が急ピッチで進められている実態を説明した。

次に、コメントの交流や利用にあたっては、開講間もない時期で顔や名前が分からない状態で、相手に意

見やコメントを送ることになる人が多数である。そこで、学生が安心して発表できるように集団づくりに十分配慮した声掛けを行い、コメント機能利用時に相手の気持ちを十分考え意見を述べるよう、人権にも配慮した留意点について説明をした。

このロイロノートは、学校で使われることを前提と

したアプリで、クラウド上で動作している。授業で使用する資料を各端末に一齐配布できたり、学習者の端末画面のロック機能、学習者が記入したカードを教員が収集したり、学習者に一齐提示できるようになっている。^{9), 10)}

講義内で利用したロイロノートの機能は、以下のとおりである。

- ・各回、写真機能を使い、手書きで書いた「ノート」を撮影し、提出箱に提出する。
- ・講義内で授業者が設定した課題に対し、意見や考えをカードに記入し、提出箱に提出したものを回答共有する。(図2)

- ・メッセージ機能を使い、授業者宛にメッセージを送信する。
- ・(発表閲覧後)メッセージ機能を使い、他の学習者宛にメッセージを送信する。
- ・模擬授業の中でシンキングツールの種類、取り込み方法を実際に行い、ブレインストーミング、KJ法を体験する。^{11), 12)}

アプリの基本機能を組み合わせ、「共有する」「記録する」「可視化する」「振り返る」ことを授業の中に、取り入れることが可能であることを実感させ、講義形式より理解が深まる演習を行った。



図 2

3. ロイロノートの活用

ロイロノートを導入後、協働学習の場面では、学生が調べてきた内容を、写真やカードにまとめ、班員に送信して、情報共有する場面がみられた。具体的には班のメンバー(5~6名)の役割分担、進捗状況や課題内容を閲覧し、自分自身の意見をコメントカードで交流を行った。さらにオンライン上で、共通のプラットフォーム(共有ノート)で班活動に取り組める利点を活用する場面がみられた。

本講義では、模擬授業の学習指導案及び関連資料について、ロイロノートの「提出箱」を利用して、電子データ(カラー資料、音声、動画も可能)で提出することとし、意図的にロイロノートを用いたICT活用場面を設定することで、使用する頻度が増加したと感想を述べる学生も出てきた。

4. 導入後の考察

ロイロノートを授業に導入し、実際に触れて、その

効果やどのように活用するかなど、活発な意見交流がみられた。それらの中で、特に多かったのが、次のような意見であった。

- ・写真、動画、PDF等にテキストや手書きを加えて簡単に資料作成ができる。
- ・様々な形式の資料を全員または個人に配布することができる。
- ・個人で作成したものを班で一つにして発表することができる。
- ・多くの人の意見を効率よく知ることができ、自分の知識を広げることに役立った。
- ・カードをつなげてプレゼンのスライドを完成させることができる。

「ロイロノート」を使用して、その有効性を実感するとともに、演習の中で気づき、出てきたアイデアを自分も授業の中に取り込みたいと感じる学生が多数であった。一方で、校務の情報化や学校における働き方改革等の観点からの感想はほとんど観られなかった。今後の授業の中で教科指導におけるICT活用、情報教育の推進、校務の情報化をまとめた「教育の情報化」

についても理解を深めることが課題です。

おわりに

I C T活用は、教員にいくつもの可能性をもたらしてくれる。その一つが学習履歴の活用である。児童生徒の評価や指導上の留意事項が詳細に蓄積され、よりきめ細やかな指導が可能になる。これにより、能力を伸ばしたり、課題を克服したりするなど、「個別最適な学び」が実現できるようになる。

また、授業のハイブリッド化による質の向上が期待できる。I C Tの時間的・空間的制限の緩和という強みを活用することにより、対面授業を授業内容や個別の学びの状況等に応じて、遠隔地の専門家（ゲストティーチャー）とともに授業を行うなど質の向上が期待できる。¹³⁾

今後、感染症等による臨時休業など不測の事態においても、I C T活用は、学びを保障すると共に全人的な発達・成長を促す役割、居場所・セーフティネットの役割をもつ学校とのつながりを維持することが可能であり、大変重要である。

【文献一覧】

- 1) 『G I G Aスクール構想の実現へ』 文部科学省 2019
- 2) 社会科・地歴科・公民科指導法 手島純編 2022
- 3) 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～』（答申）中央教育審議会 2021
- 4) 文部科学省『中学校学習指導要領』 2017
- 5) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』 2017
- 6) 文部科学省『高等学校学習指導要領』 2018
- 7) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』 2018
- 8) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 公民編』 2018
- 9) ロイロノートのI C T“超かんたん”スキル 和田誠編 2022
- 10) 逆引き版 I C T活用授業ハンドブック 渡辺光輝編 2022
- 11) 問題解決学習で育む「資質・能力」 藤井千春 2020
- 12) 教職のための中学社会科教育の理論と指導法

宇内一文編2023

- 13) 3時間で学べる「令和の日本型学校教育」Q&A
新しい学習指導要領を研究する会 2022

Received date 2023年12月12日

Accepted date 2023年12月12日